家の奥に隠される女性　　2008/10/23 09:42

イザベラ・バード「朝鮮紀行」

前のエントリーで「男女共同参画」は「女子差別撤廃条約」から出発していると小林正氏が指摘していましたが、この女子差別で思い出したのが、以前購入したイザベラ・バード女史による「朝鮮紀行」です。書店の店員さんに探して貰って千円札を出したら「1650円です」と云われてビックリしたのを思い出します。文庫本でこの価格の買い物ははじめただったもので。

その彼女の「朝鮮紀行」から第29章「朝鮮の女性の地位」から一部を抜粋して紹介します。この朝鮮紀行は「英国貴婦人の見た李朝末期」とサブタイトルが付けられているように女史が四回にわたって朝鮮を調査旅行して、その印象を1897年11月に上梓したもので、当時の朝鮮を知るには最適な一冊です。

朝鮮の女性の地位（李朝末期）

朝鮮女性の地位の現状を推しはかるのはじつにむずかしい。完全に蟄居（ちつきょ）するのが上流階級では厳然としたルールなのである。女性には専用の敷地と住まいがあり、男性用の住まいの窓はその方向に開いてはいけないことになっている。客も訪ねた家の女性についてはいっさい言及してはならない。元気かどうか尋ねるなどもってのほかで、女性はいないと考えるのが礼儀なのである。

女性は教育を受けず、どの階級においてもきわめて下位に見なされている。朝鮮人男性は女性とは当然男性より劣ったものだという、ある種二元的な哲学を持っている。学校時代に『童蒙先習』、『十八史略』、『小学』でこういった見方を植えつけられ、おとなの男たちとつきあうようになると、それがますます強化されるわけである。

583頁と読み応えのあるボリュームです

女性の蟄居は五〇〇年前、社会腐敗がひどかった時代に家族を保護するために現王朝が導入した。それがおそらく今日までずっとつづいてきたのは、ある朝鮮人がヒーバー･ジョーンズ氏に率直に語っているように、男が自分の妻を信頼しないからではなく、都市社会と上流階級の風紀が想像を絶するほどに乱れ、男どうしが信頼し合えなかったからである。

かくして下層階級をのぞき、女性は老いも若きもすべてが法よりもつよい力を持つしきたりにより、家の奥に隠されている。夜間にしかるべく身を覆って出かけるか、どうしてもという場合にぴったりと扉や窓を閉ざした輿に乗って旅行したり人を訪ねたりするのが、中流以上の朝鮮女性にとっては唯一の「外出」で、下層階級の女性が外出するのはもっぱら働くためである。

暗殺された王妃はわたしが朝鮮国内を旅行していることをそれとなく指して、自身は朝鮮のどこも見たことがなく、ソウルすらコドゥンで通るところ以外なにも知らないと語っていた。

他の男と手が触れあっても殺された

ダレ神父[『朝鮮教会史序論』の著者]によれば、故意と偶然のいかんによらず、よその男と手が触れ合っただけで

も、娘は父親に、妻は夫に殺され、自害する女性すらいたという。またごく最近の例では、ある下女が女主人が火事に遭ったのに助けだそうとはしなかった。その理由は、どさくさのなかでどこかの男性が女主人にさわった、そんな女性は助けるに値しないというのである！。

法律も女性の住まいまではおよばない。自分の妻の部屋に隠れている貴人は謀叛罪の場合をのぞき捕えることができない。また家の屋根を直す際には、隣家の女性が目に触れないともかぎらないので、あらかじめ近所に修理する旨を知らせなければならない。七歳で男女はべつべつになり、女の子は厳しく奥にこもらされて結婚前は父親と兄弟以外、また結婚後は実家と嫁ぎ先の親族以外、男性にはまったく会えなくなる。

女の子は極貧層でもみごとに隠れており、朝鮮をある程度広く旅行したわたしでも、六歳以上とおぼしき少女には、女性の住まいでものうげにうろうろしている少女たちをのぞき、ひとりも出会ったことがない。したがって若い女性の存在が社会にあたえる華やぎはこの国にはないのである。

女性の地位は未開国並み

とはいえ、女たちがこのシステムのもとでくよくよしたり、西洋人女性が享受しているような自由を求めたりしているかというと、まったくそんなことはない。蟄居は何世紀もつづいている慣習なのである。自由という概念は危険で、当の女性たちは自分たちは貴重な財産だからしっかり守られているのだと考えているのではなかろうか。ある聡明な女性に自由に外出できる西洋の慣習をどう思うか執拗に尋ねたところ、「あなた方はご主人からあまり大切忙されていないと思う」が答えであった！。

妾を囲うことは公認されてはいるものの、尊ばれてはいない。男性の妻なり母親なりが妾を選ぶことはめったになく、妾は多くの場合、正妻から夫に財力や地位があるからこその添え物、われわれの世界でいえば自家用馬車や執事のように思われている。

内縁関係から生まれた子供は社会的にひどく蔑視され、つい最近までは職位によっては就けないものもあった。法的には朝鮮は一夫一婦制で、男やもめが再婚して子供をなしても、初婚の際にできた子供の特別な権利は変わらない。

少女向けのこの国独自の学校はなく、上流階級の女性は朝鮮固有の文字が読めるものの、読み書きのできる朝鮮女性は一〇〇〇人にひとりと推定されている。概して中国から入ってきた考え方のようであるが、鬼神に関する民間信仰、男性が受ける教育、文盲、法的権利のなさ、慣習の根づよさが重なって、開化国でありながらも女性の地位を未開国並みに低くしてしまっている。

カテゴリ: コラむ　フォルダ: 指定なし　コメント(3)

タグ: 李朝朝鮮　イザベラ・バード　蟄居　朝鮮紀行

コメント(3)

コメントを書く場合はログインしてください。

Commented by 花うさぎ さん　2008/10/23 10:01

この当時の朝鮮は「清」の属国だったわけですが、これ以降、日本の日清戦争、日露戦争、韓国併合へと近現代史に繋がっていく訳です。併合前の朝鮮の様子がよく分かる一冊です。

このあとは、本日の「対馬街宣集会」と25日の「君に伝えたい日本」の集会のレポートをお届けする予定です。

Commented by ぱんたか さん　2008/10/23 21:07

To　hanausagiさん

買っては見たものの、まだ読んでいない一冊です。
触発されて、今読んでいる『主張せよ　日本』の次に読むことにします。

多くの意味で『日本奥地紀行』との落差は想像以上ですね。

Commented by 花うさぎ さん　2008/10/23 23:10

To　ぱんたかさん こんばんは。

＞買っては見たものの、まだ読んでいない一冊です。

あれ～、私もそういう本が三冊あるんです。

＞触発されて、今読んでいる『主張せよ　日本』の次に読むことにします。

おっ、古森さんの最新刊ですね(＾＾)。

＞多くの意味で『日本奥地紀行』との落差は想像以上ですね。

こっちは私はこれからです。本屋で頼んだとき在庫切れだったもので。でもさわり位は承知しているので楽しみです(＾＾)。